



## 巻頭言

# 小さなアメニティ感覚からの街造り

福岡大学工学部教授 花 嶋 正 孝<sup>※)</sup>

ごみ屋の狭い視野から今日のアメニティ街造りに一言もの申そう。

アメニティばやりの今日、都市の中において、のびのびした清潔な空間、街並に調和した建物、すがすがしい空気、清澄な水、緑あるいは小動物などに触れ合える環境、と人々の情操を高め、心理的にやすらぎを与える街造りが21世紀へ向けて進められている。

我が都市の中心街である天神の交差点に立ち止まって、周辺を見渡すと、街の屑かごはごみでパンク状態、低木の植え込みには空缶、空ビン、自動車の停留所には煙草の吸殻の散乱、これが西日本を代表する街の顔であるとはどう見てもうなずけない。都市の美しさとは何なのであろうか、緑豊かな青い水辺に囲まれた広場だけなのであろうか、高層ビルと広場との調和だけであるのだろうか。

明治11年6月から9月までの約3カ月間をかけて、東京から北海道までを旅行したイギリス婦人イザベラ・バートが、先ず日本の美しさに打たれたのは、街の清潔さであった。日本の或る都市の清潔さについて、『街は美しいほど清潔なので、日光のときと同じように、

このよく掃き清められた街路を泥靴で歩くのは気が引けるほどである。』とも言い、『藁や棒切れが一本でも、紙一枚でも散れば、たちまち拾い上げられて、片付けられてしまう。』(川添登著)。

我々庶民が、先ず感ずるアメニティとは、このような身近なところにあるのではなからうか？ このアメニティ感覚をより一層本物にするためには、子供の頃よりの環境美化意識の学習であろう。それと同時に市民の身近なアメニティ感覚の向上が先ず第一であろう。

我が都市福岡市でもM・C運動（モラルでクリーン運動）が盛り上がっている。これは、福岡市民の社会モラルの向上並びに定着化を図るため、市民団体・報道機関などの400団体と行政が一体となり推進しているものである。

環境の創造作業は、日本の豊かな経済力を持って、21世紀に向かって今後ますます盛んになっていくであろう。しかし、造られた物をより美しく、より快適に活用するためには、それを管理することに如何に金が掛かり大変なことであるかを改めて考えたい。行政は物を造る時には金を出すのが、管理には金を掛け

※) 当協会常任理事

たがらない体質を変えねばならないし、そこに住む住民も『自分たちの街を自分たちの手で美しくする』といった地域連帯意識が如何に大切であるかを考えるべきである。

三重県の中学生の作文の中に、『環境美化とは、私たちの生活の中で、自分たちの足下に落ちているごみを一つ拾う心、空缶を一つ持ち帰る心から生まれるものではないかと思った。海女さんと一緒に掃除した海は、本当に美しくなった。(中略)夕日がまぶしい、明日もまた晴れだ。』

私共の愛する街をこの「小さなアメニティ感覚」でより住みよい街にしようではありませんか。

## 著書略歴

氏名：Masataka Hanashima

学歴：九州大学工学部土木工学科卒業

工学博士 技術士

職歴：福岡大学工学部土木工学科教授

賞：環境賞

研究：廃棄物の最終処分技術

廃棄物の跡地利用に関する技術

委員：環境庁：埋立跡地適正管理対策検討会座長

厚生省：最終処分場の管理技術に関する委員会委員長

土木学会：広域最終処分場委員会

全国都市清掃会議：最終処分場技術指針改訂委員会主査

福岡県：福岡県国土利用計画地方審議会委員

